三重大学教育学部研究紀要　第62巻　教育科学　（2011）　229 － 234頁

スウェーデンにおける sex och samlevnad（性と人間関係）の授業から何を学ぶか

佐　藤　年　明

What Should We Learn from the Instructions on 'Sex och Samlevnad（Sexuality and Personal Relationship）in Sweden?

Toshiaki SATOU

要　　旨

本稿は、中部教育学会第59回大会（2010年6月26日　愛知工業大学）における筆者の同題の自由研究発表報告配付資料に加筆修正を加えたものであり、筆者が日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)海外学術調査）の交付を受けて行なった研究の報告書『共生社会における性教育の現代的意義－スウェーデンの先進的事例に学ぶ－』（課題番号19402048　2007-2009年度）を基盤として、さらに研究の総括を深めることを意図したものである。

Ⅰ．研究の経過

報告者は1997年からスウェーデンの sex och samlevnad に関する調査研究を開始し、2001-2004年度に「スウェーデン王国における性教育の歴史と現在の課題」（課題番号13680292）、2007-2009年度に「共生社会における性教育の現代的意義－スウェーデンの先進的事例に学ぶ－」（課題番号19402048）の各研究題目で日本学術振興会科学研究費補助金の交付を受けて研究を継続してきた。

2009年度で二度目の科研研究を終了し、報告書[*1]を公表した。スウェーデン性教育の理論研究としても実践研究としても、まだまだ緒に就いたばかりの感があるが、近い将来の調査研究再開を見通しながら現時点での中間的な総括を行ないたい。

Ⅱ．性教育「必修」の意味

スウェーデンでは1955年に性教育が必修化された。つまり、「教科領域において教授することが義務づけられた[*2]」。しかし、この「義務づけ」の意味がこれまでの調査研究の中で正直言って未だ明瞭に把握できていない。

＊1　拙稿『共生社会における性教育の現代的意義―スウェーデンの先進的事例に学ぶ― 2007-2009年科学研究費補助金交付研究（基盤研究（Ｂ）（海外学術調査））研究報告書（課題番号 19402048）』所収 2010年（以下「2010報告書」と略記）

＊2　Lena Lennerhed「学校における性教育―スウェーデンにおける論争の歴史的回顧」1995年 拙稿「スウェーデン王国・デンマーク王国の性情報および性教育事情覚書（その3）―スウェーデン王国の性教育略史―」の中で訳出 『三重大学教育学部研究紀要』第50巻 教育科学 1999年 P.130

スウェーデンの研究者 Lena Lennerhed は、スウェーデン性教育史を回顧した論文の中で、上に引用したとおり 1955 年の性教育必修化に言及した直後に、「この決定はスウェーデンでほとんど関心を引かなかった。しかし海外では関心を引いた[*3]。」という意味深長なコメントをしている。

Lennerhed によれば、20 世紀前半のスウェーデンでは、性教育賛成論と反対論の論争が繰り広げられたが、1940 年代にはすでに学校に性教育が導入されていた。だから必修されたからといって国内ではとりたてて注目されなかったということであろうか。

ともかく、必修化からすでに半世紀以上を経過している。

「必修」と言っても、性教育に関する教科が存在するわけではない。スウェーデンの性教育は sex och samlevnad（性と人間関係）と呼ばれているが、この名称の教科は存在しない。sex och samlevnad は、カリキュラムの中に教科の枠を越えて位置づく「学習テーマ」ともいうべきものである。

最近のスウェーデンのナショナル・カリキュラムのシラバスを見ると、生物と社会の中に性に関わる学習項目がある。5 学年末と 9 学年末に限定して設定されている達成目標について言えば、生物では性に関わる目標項目があるが、社会には該当するものがない[*4]。また、いずれにしてもシラバス上の内容や目標はきわめて概略的なものであり、学校現場での学習内容を直接規定し拘束するようなものではない。

報告者が 2008 年 9 月に訪問した Stockholm 近郊の Dalarö skola の教師 Ms Jenny Dufberg は、勤務校の sex och samlevnad（Dalarö skola での呼称は samlevnad）の学習は 5〜9 学年で行なわれ、5〜6 学年では年間 5〜20 時間（時間数の規定なし）、7〜9 学年では年間 20 時間の授業を行なうと紹介した上で、「Dalarö skola では 1 年間 20 時間ですが、1 年間で 1 時間の学校もあります。（中略）学校で自由に決めればいいのです。」と述べている[*5]。

年間 20 時間の sex och samlevnad の授業を行なう学校がある一方、年間 1 時間しか学習しない学校もある。20 時間の学習を行なう学校に比べれば、1 時間の学習ではゼロに等しいとも思えるが、とにかく学習時間数で拘束することは行なわれていないようである。日本の学校が文部科学省・教育委員会から年間授業時数確保を厳しく求められるのとは、大きく異なる。

スウェーデンにおける国家の教育課程政策と個々の学校現場の教育課程との関係については、詳細な状況はまだ把握できていないが、「カリキュラム上必修であれば国家が決定した雛型に従って教育するのが当然」という日本の教育行政関係者の頭にあるような常識は存在していないようである。

2008 年 2 月に移民の生徒を対象とする sex och samlevnad の教育に熱心に取り組んでいる高等学校（Blackebergs gymnasium）の副校長である Mr. Magnus Silfverstolpe にインタビューする機会があった（1 年後に彼の授業も参観）ので、彼が勤務する高等学校（Blackebergs gymnasium）の教師たちの sex och samlevnad への姿勢について尋ね、さらに積極的に取り組まない教師に対しては校長（このインタビュー当時は Magnus の肩書きを校長と誤解していた）はどのように対応するのかと尋ねたところ、以下のような答えが返ってきた。

「科目を教える場合にその科目の中にセックスのことを入れるという授業はもうカリキュラムに組ん

---

*3　Lena Lennerhed「学校における性教育―スウェーデンにおける論争の歴史的回顧」1995 年 拙稿「スウェーデン王国・デンマーク王国の性情報および性教育事情覚書（その 3）―スウェーデン王国の性教育略史―」の中で訳出 『三重大学教育学部研究紀要』第 50 巻 教育科学 1999 年 P.130

*4　拙稿「『シラバス 2000（2008 年改訂版）基礎学校用』（スウェーデン学校局）における sex och samlevnad（性と人間関係の教育）関係事項のピックアップ」「2010 報告書」P.148-149

*5　「2010 報告書」P.57

であるから、やらなくてはならない。やらなくてはならない彼らの仕事だから、それに対して自分はこうしろ、ああしろということはできない[*6]。」

Magnus は、必修である sex och samlevnad の実施についてはあくまで教師の自覚に待つのであって、管理職による強制はあり得ないと述べている。これはあくまで一学校の一管理職の対応であるし、Magnus は管理職でありながら sex och samlevnad の授業も行なっていて、授業に取り組むことの重要性と共に難しさも十分理解していると思えるので、教師の授業実践について特に理解が深い管理職であるという特殊性があるかもしれない。しかし、スウェーデンの学校教育課程における「必修」の意味を考える一つの参考にはなるだろう。

Ⅲ．基礎学校における sex och samlevnad のカリキュラム例

前述の Dalarö skola におけるインタビューによれば、同校で実施されているカリキュラムは以下の通りである[*7]。

- 1 ～4 学年では、子どもはどうして生まれるか、また赤ちゃんの成長など、生物学的な話を（科目としてでなく）担任がする。女子のメンスのこと、ナプキンのことなどは、学校看護師の Ms Agneta Lewerth がクラスに入って教える。スウェーデンでもまだかなりの教師が性について話すことを嫌がるので、担任教師に呼ばれて Agneta が教えに行くこともある。
- メンスについての学習は男女合同学習の場合もあるが、そのことで騒いだりする子がいる場合は合同学習はふさわしくない。子どもたちがどれくらい成長しているかが基準になる。
- その際、性交についても教える。子どもたちは教える前にみんなもう知っている。
- 5～9 学年では samlevnad という「教科[*8]」を置いている。
- 5～6 学年では samlevnad の授業を年間 5 ～20 時間の範囲で自由に設定する。
- 7～9 学年では samlevnad の授業を年間 20 時間（@60 分）設定する。
- 女子は 5 学年でメンスについて学ぶ（Agneta が教える）。男子もだいたい 5 学年で学ぶ（思春期が始まる時期）。
- 5～6 学年では、性交についての漫画を見せる。
- samlevnad の実施時期はだいたい秋と春（各 10 時間）である。しかし生徒の成長の度合いにより変わる。
- Ms Jenny Dufberg（Naturkunskap＝理科の教師）は理科の時間に 2 時間くらい実施する。
- Dalarö skola では実施時期を固定していない。欠席者が出ても対応できるように。
- 教科書は使っていない。よい教科書がないので、スウェーデン性教育協会などから教材を入手してい

---

*6　「2010 報告書」P.77

*7　同上 P.57-61 に若干加筆した。

*8　教育方法学の専門家ではない通訳を介しているので、「教科」が正確な訳語であるかどうか確認できない。前項で述べたように、スウェーデンのナショナル・カリキュラム上には性に関する「教科」は存在しない。生物その他の教科の中に性に関する学習を位置づけているのである。一方インタビューの中で Jenny は Dalarö skola では 1990 年代以降 sex och samlevnad という呼称を samlevnad に変更した（後でスウェーデン性教育協会の Hans Olsso 氏に確認したところ、これは全国一致した動向ではなかったが）と述べていたことから、Dalarö skola はカリキュラムの構成に関して学校の独自性を強く発揮していることも考えられる。とすれば、ナショナル・カリキュラム上にはなくても、Dalarö skola のカリキュラムには samlevnad という教科的な領域が存在するのかもしれない。また、ナショナル・カリキュラムの区分とは違う学習領域を学校が独自に設定することについて、スウェーデンの教育行政が寛容であるということも考えられる。

る。

・ほとんどの場合、Jenny と Agneta の 2 人が共同で教える。学校看護師の Agneta は教師資格はないが生物学的な面について教える。7〜9 学年の年間 20 時間は、Jenny と Agneta がいっしょに教える。

Dalarö skola では 1〜4 学年でクラス担任（＋学校看護師）が、7〜9 学年で理科担当教師＋学校看護師のチーム（他の担当者もいるはずだが不明）が性教育を行なっている。5〜6 年でも実施しているが、担当者は確認できなかった。初等教育の初期には担任による授業も行なわれているが、ある段階で授業は教科担任制となり、性教育についても自己の専門として引き受けられる教師が担当しているようである。samlevnad が設定されている 5 学年以降に教科担任制になるのかどうかを確認できなかったが、もしそうであるなら、日本では小学校高学年に該当する段階から教科担任制がとられていることになる。思春期に入る子どもたちの心身の状態のきめ細かな把握とケアは、日本の小学校であれば学級担任（や養護教諭）の仕事であるが、この時期にスウェーデンの基礎学校でクラス担任がどの程度の役割分担をになっているのかを今後調べる必要がある。一方日本の中学校に該当する 7〜9 学年も理科等の教科担当者が samlevnad の授業を行なうわけであるが、生徒の性に対する意識・行動や授業中の様子について、授業担当者とクラス担任がどのような情報交換や協議をしているかについても調べる必要がある。

Dalarö skola に関するその後の情報では、Jenny は他地域の学校に移り、Agneta は病気で仕事を一時期休んでいたとのことである。従って今後 Dalarö skola 訪問と授業観察を継続できるかどうかは不明である。他の学校に入ればまた別のその学校の「個性」があると思われるが、継続性にこだわりすぎずに条件のあるところで授業観察を続けたい。

Ⅳ．公の場で性について学ぶことについての学習者の感情・意識

2007-2009 年度の科研研究で、基礎学校 3 校、高等学校 1 校で sex och samlevnad の授業を参観した。そしてこのうち Dalarö skola と Blackebergs gymnasium ではビデオ撮影も許可され、詳細な授業記録を作成することもできた。この 2 校の授業については、すでに学会報告も行ない、それをもとに研究論文[*9]も公表したので、本稿では省略する。

Dalarö skola では（2008 年 9 月）、7 学年男子グループと 9 学年男子グループで、リアルな形状のペニスのモデル（プラスチック製？）を 1 人 1 個与えてコンドームの装着練習を行なっていた（女子グループでも同様に学習するという）。この学習において、生徒たちは最初にペニスのモデルとコンドームが配付されたときには、クスクス笑うなど恥ずかしさをうかがわせるような反応を見せたが、私語など細かな反応については記録できていないので、生徒たちにどのような感情が生じていたか、本当のところはわからなかった。

sex och samlevnad の学習について子どもたちがどのように受け止めているかを知りたいと考えた。sex och samlevnad の授業を見学・記録した学校では、授業後に授業を受けた個々の子どもたちの話を聞くことまではできなかったので、科研研究の末期に、現地在住通訳の大橋紀子氏に依頼して、6 名のスウェーデン人青年へのインタビュー[*10]を実施した。男女各 3 名、年齢は 16 歳が 3 名と、19 歳、21 歳、28 歳が各 1 名である。

---

*9　拙稿「スウェーデンの基礎学校および高等学校における sex och samlevnad（性と人間関係）授業実践事例の検討」『三重大学教育学部研究紀要』第 61 巻 教育科学 2010 年（「2010 報告書」P.26-38 に再録）

*10　「2010 報告書」 P.123-127

ここでは、「sex och samlevnad の学習をするとき、恥ずかしいと感じるか？感じるとすればどういうときか。」という問いに絞って彼らの答えを見てみよう。

16 歳男性：恥ずかしくはなかった。友だちは笑ったりしていたが、男子と女子で反応は変わらなかった。教室で性について話すことを別に嫌だとは思わなかった。

16 歳女性：3 年生の時は、興味があったので授業の後先生にいろいろ聞きに行った。8 年生の時は普通の授業と同じだった。

16 歳女性：全然。性病について学ぶときも、みんな平気で「知っている」「知ってる」と言っていた。

19 歳女性：5 年生の時は少し恥ずかしかった。照れ笑いしたりした。タブーという感じで、突然いろいろ話したので。9 年生では全然恥ずかしくなかった。情報を受け入れる態勢ができていたから。

21 歳男性：少し恥ずかしかった。そんなに細かいことについて話すべきでないと思った。

28 歳男性：恥ずかしいと感じなかった。

この回答を見ると、やはり個人差があるが、この 6 人の中では「恥ずかしかった」という回答は 2 名で少数派である。

仮に日本で同じ問いを 10 代〜20 代の青年に投げかけた場合、推測だがほとんどが「恥ずかしかった。」と回答することが予想される。恥ずかしくない、恥ずかしがることではないと答える若者が比較的多くいると思われるスウェーデンの状況は、やはり日本とは異なっている。

前述の Dalarö skola 関係者へのインタビューでもこの点を質問した。「思春期以前に性交について教えた方がよいと思うか？」と問うと YES の回答であったので、「それは性について学ぶことが恥ずかしいという気持ちが起こる前に教えた方がよいということか？」と重ねて問うと、スウェーデンではテレビや上のきょうだいからの情報などの影響ですでに幼稚園くらいから性交に関心を持っているという。従って学校の教室で性について学ぶときにも恥ずかしいという気持ちはあまりないということであった。教師と子どもたちが性に関してオープンなので子どもたちは何か問題があったら教師に話をしにいくという [*11]。

筆者は日本の性教育について考えるとき、「思春期以前」と「以降」が大きな区切りとなると考えてきた。小学校低学年から高学年に至る性教育の実践記録の中で、思春期に入る前に性交を含む生命誕生過程について教えると子どもたちは抵抗なく受け止めるが、思春期に入ってからその学習を始めると羞恥心が大きな抵抗となって学習がうまく進まないという指摘が行なわれていることも踏まえてである。性に関する羞恥心と思春期という発達段階への突入を密接不可分のものと捉えてきたのである。

しかしスウェーデンでの青年たちや教師へのインタビューを経て、上記のことを国を超えて一般化することには慎重であるべきだと考えるようになった。その社会における家庭や教育機関の中での人間関係のありようによっては、子どもから大人への変わり目において性に対する羞恥心が急速に芽生えるとは限らないのではないかと。

これについては、自明と考えていた日本社会についても小学生や中学生の意識の実態をもっと踏み込んで探る必要があるし、スウェーデン社会においてもさらに慎重に聞き取りを進めたい。初対面の外国人調査者に対して、しかも通訳を介して、相手がどこまで率直に性に関する心理状態を語ってくれるか、ということも考慮に入れる必要があろう。さらに異なる文化圏、他のヨーロッパ諸国や、また性に関する戒律が厳しいイスラム社会などにおける子ども・青年の性心理についてのデータを渉猟する必要がある。

[*11] 「2010 報告書」 P.58-59

Ⅴ．おわりに－研究の継続に向けて

報告者が 1990 年代後半にスウェーデンの性教育研究に取り組み始めた動機は、スウェーデンが日本から遠く離れた気候風土も文化も日本とは大きく異なる国、社会ではあるが、そこにおける性教育が世界的に見て先進であると日本の性教育関係者から目されている（らしい）ということであった。その後研究を続けて現在に至っているが、最初の動機に影響されてスウェーデン性教育の「先進性」を探し求めようとする傾向がともすれば強くなりがちである。また実際に、スウェーデンの性教育をリードするスウェーデン性教育協会の関係者にインタビューしたり、彼らが紹介してくれた基礎学校や高等学校を訪問して授業観察、インタビューを行なってきたので、おおむねスウェーデン性教育の「先進部分」を見てきたことになる。

しかし、研究者や教師の話をいろいろ聞くにつけ、「スウェーデン全体の性教育が国際的に見て先進的である」ととらえることはできないことがわかってきた。スウェーデンの学校でも、やはり熱心な（一部の？）が性教育に精力的に取り組んでいるのであって、性教育の担当をいやがる教師達も一方で存在する。このあたりは程度の差こそあれ日本の場合と共通している。

スウェーデンでは日本のようにナショナルカリキュラムが法的拘束力を持つわけでなく、また教師の性教育への積極的取り組みを抑圧しようとする大きな外圧は存在しないようであるが、それだけに個々の教師の性教育への姿勢、熱意は、1%から 100%まで実に多様なようだ。今後もスウェーデンの学校訪問、授業観察を続けながら、その中で優れた実践事例に出会った場合、その実践をスウェーデン社会の文脈の中でどう位置づけるかについて、より慎重に多面的に検討したい。